

あおぞら

発行:愛知県被災者支援センター

住所:名古屋市東区泉 1-13-34

名建協 2 階

TEL:052-971-2030

FAX:052-971-2050

開館:月曜～金曜 10 時～17 時



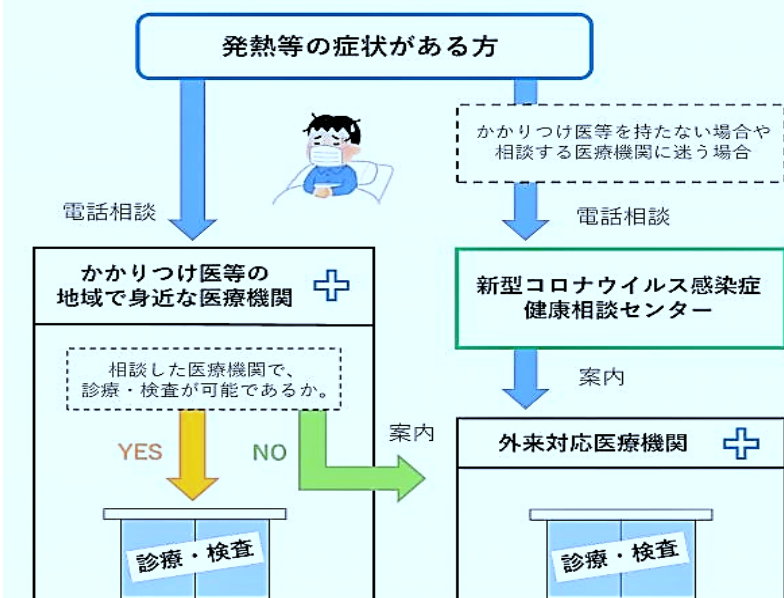
【濱田農園農作業体験交流会】(P3)



【田原交流会】(P4)



発熱患者等の外来診療フロー図 (2023年5月～)



もくじ

P1. 表紙写真

P2～4. 交流会(甲状腺エコー検診&交流相談会、濱田農園農作業体験交流会、田原交流会)

P5. おすすめの一冊①・②

P6～8. ユース東北交流ツアー③、JCN 会議&福島沿岸部ツアー

P8. 被災者支援センターの動きから、イベント情報、レシピ他

ワクチン関連相談窓口(看護師によるワクチン副反応健康相談窓口)

電話 : 052-954-6272

時間 : 9:00～17:30(平日)

甲状腺エコー検診&交流相談会 5/28(日)10:00~15:00@一宮市千秋病院

愛知県民主医療機関連合会(以下民医連)との共催の甲状腺エコー検診&交流相談会は、コロナ感染症の影響で2年ぶりの開催となりましたが、一宮市の千秋病院で5/28(日)10:00~15:00、甲状腺検診に11世帯20名(大人16名、子ども4名)が参加されました。受診回数:初回(2)、2回(3)、2~3回(1)、3回(1)、4回(2)。

甲状腺検診には、民医連の医師2名、看護師1名、検査技師6名等総勢16名のスタッフの皆さんが検査等に当たられました。

交流相談会「みんなのぼ」には、12世帯21名(大人17名、子ども4名)が検診の前後に参加され、相談等の対応には司法書士、在宅保健師、多文化ソーシャルワーカー、一宮・名古屋市社協、福島県名古屋事務所が対応していただきました。



交流コーナーは2種類の企画で、バラジャムづくりとクラフト細工コーナーを準備して、避難当事者のアロマ講師他ボランティア・スタッフ18名が参加しました。



(↑)バラジャム作り (↓)気楽におしゃべり (↑)クラフト細工に挑戦



《アンケートより》

- ・定期的に見てもらえる安心感があります。日々の不安などの相談もできて、良かったです。
- ・現状がわかって良かったです。
- ・コロナで(検診実施の)キャンセル等あり、久しぶりに受けられて安心しました。
- ・結果も聞けて安心できました。
- ・できれば今後も受診できれば良いと思います。

・支援して下さる皆さまとも長いお付き合いで、顔を見ると安心!元気でしたか?と気軽に言葉を交わせる様(仲)になって、このことだけでも、とてもうれしく元気になれます。

「玉ねぎ・じゃがいもの収穫とさつまいも苗植え」



玉ねぎの収穫



じゃがいもの収穫「大小いろいろあるね」



「昼食の盛り付けを手伝いました」



涼しい緑の木陰で、昼食タイム



やぐらに登った!



さつまいも苗を植え、芋掘りが楽しみ



作業は終了、お疲れ様でした!!

〈東浦町総合ボランティアセンターなないろの森岡さんから、初参加の感想を寄せていただきました〉

当日は天気にも恵まれ、参加されたみなさまと楽しいひと時を過ごさせていただきました。

震災から12年。交流会のあとは爽快な筋肉痛とともに、今の自分に何ができるのか、改めて考えようとの思いが残りました。たいへん有意義な機会をありがとうございました。

みなさまと柿の木の下で食べたお昼ご飯も美味しかったです!

田原交流会

7月15日(土)11時から14時まで、田原市福祉センターにて交流会が開かれ、15名が参加されました(主催:コープあいち・田原市・社会福祉協議会)。ご担当のお一人の田原市役所地域福祉課の柴田様より、久しぶりの交流会開催についての思いなどを寄せていただきました。

9回目を迎えた田原市被災者支援交流会(2023年7月15日)

平成23年に起こった東日本大震災から3年後、当時田原市には6世帯11人の方が避難し、慣れない環境の中で生活されていました。少しでも田原市を知り慣れたいという思いと、田原市以外の近隣市町に避難された方々との情報共有の場となるよう、市内に住むコープあいちの地域委員さんからの発案をきっかけに、平成26年5月に田原市で、コープあいち、田原市社会福祉協議会、愛知県被災者支援センター、そして市が協働し、第1回目の被災者支援交流会が開催されました。それからコロナ禍での交流会中止をはさみつつも、今回、第9回目の被災者支援交流会を開催することができました。

毎回市としては予算のない中、コープあいちさんの絶大なる支援と、愛知県被災者支援センター、田原市社会福祉協議会、田原市内の農家さん等からの協力によって、おいしい食事と田原市ならではの景品付きビンゴゲーム、そして今回は染め菊体験を皆さんにさせていただきました。

食事中には、東日本大震災発災当時のことをまるで昨日の事のように話される方もいて、まだまだ東日本大震災が大きな影響を残していることを痛感しました。食事後のビンゴゲームでは田原市の野菜や花といった景品を手にする皆さんの笑顔が見られて、開催した側も嬉しい時間をいただきました。景品のスイカを割らずに無事に帰れたのが心配ですが。

今後も皆さんの笑顔が見られるよう交流会を続けていきたいと思いますので、またぜひ田原市にお越しください。



「私のおすすめの一冊」①『セロ弾きのゴーシュ』 宮沢 賢治作 茂田井 武絵 福音館書店

知り合いから『銀河鉄道の父』という題の映画を紹介されて、「これは宮沢賢治の父のことか？」と想像しました。当たり！家族愛に満ちた、心優しい賢治の父親が主人公。ところが、賢治のことを誤解していた私は、質屋でお金持ちのこの家族が不思議でなりませんでした。賢治の家柄ってお金持ち？貧乏でなかった？お恥ずかしいが、私はこの程度しか知りませんでした。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

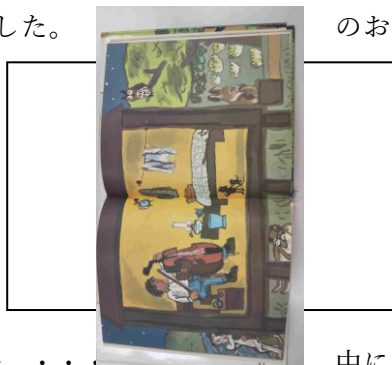
雪ニモ夏ノ暑サニモ負ケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ怒ラズ

イツモシズカニワラッテイル・・・



この詩は恐らくどなたもご存知ですね？38歳で、肺結核で死の淵にいる賢治の耳元で、父親が全部を暗唱する場面があります。私も高校生の頃には全部を暗唱したものです。そもそも賢治は「童画」とはいうけれど、文章が難しいですね。私が子育ての時に子どもに読んでやったけれど、子どもたちに理解できたかは解りません。

今日は『セロひきのゴーシュ』（絵本版）をご紹介します。チェロ（セロ）を弾くゴーシュが、楽手の中では一番へたで、楽長に叱られるところか

ら始まります。こわれた水車小屋に帰宅して、夜遅くまで練習します。

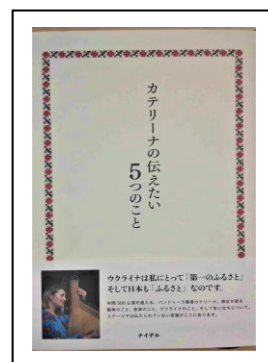
そこへいろんな動物がやってきて、邪魔をします。が、ある時、野ネズミが子ネズミを連れてやって来ます。「先生はみんなの病気をなおしている」、「この子が、あんばいがわるくて死にそうでございます。助けてください」と訴えます。先生のおかげで、うさぎさんのおばあさん、たぬきさんのおとうさん、いじわるのみみずくまでなおしたのだから、この子もなおしてください！と。「ここのものは病気になると、みんな先生のおうちのゆか下にはいってなおす」というではないか！ゴーシュはねずみのこどもをつまんで、チェロのあなから中に入れて、なんとかラプソディとかいうものを、ごうごうががあとひきました。

曲が終わって、穴から出て来た子ネズミは、しばらくめをつぶったまま、ぶるぶるふるえていましたが、にわかに起き上がって走り出しました。よくなった！

六日目の夜、町の公会堂のホールで金星音楽団は第六交響曲を演奏し、拍手が止まりません。楽長が「ゴーシュ君、なにか出てひいてやってくれ」アンコールに応じてくれと。（編集委員：瀧川裕康）

②『カテリーナの伝えたい5つのこと』 カテリーナ著 ナイデル(株)

カテリーナはウクライナの民族楽器バンドウーラ奏者で、19歳で来日し、今では日本各地で年間300公演を行っています。先日、そのコンサートを聴きに行きました。生後一か月で cholera 原発事故にあり、プリピャチ市からキーウ市に強制疎開となりました。事故の記憶は無いものの、その生活は事故の影響を受けていました。学校へ行くようになると、同級生から、「あなた達と一緒にいると放射能に移るからいやだ」、「夜になるとあなた達は光っているから怖い」と差別されました。そんな中でもカテリーナは、ピアノが好き、歌うのが好きと子ども達の合唱団に入り、バンドウーラの練習も一生懸命に励みました。そして大人になり、日本で夢をかなえて活躍しています。美しい歌声は、時に静かにやさしく、時に強く激しく、ウクライナの歌や日本の歌、平和の歌を歌います。彼女は、今、戦渦の母国を想いながら「平和で安全な日本で歌っていていいの？どんな歌を歌えばいい？と葛藤しながら、いつも歌っています」と、本の中でも率直な心情が語られています。（戸村 京子）



引き続き、東北交流ツアーに参加されたユースの感想です。今回は、牛来夢巴さん(東海学園大学教育学部3年)の原稿を掲載させていただきました。

①安全神話

震災前、私たちの住む福島県沿岸部では安全神話がありました。それは、原子力発電所はとても安全な建物で絶対に事故を起こさない、という神話でした。どうやらこの神話は、原発推進派と反対派の二極対立がさらに安全神話を強め、事故が起こった際の検討も不十分だったと言われていました。この安全神話を大人も子どもも信じていたし、町のポスターや周りの人の話から、安全だ、安全だと主張され続けていました。

②3.11 3月11日午後2時46分。

学校で帰りの会をしている時でした。「机の下に潜って!」と先生に言われるまで、私は揺れに気づきませんでした。クラスの子達の声でかき消されていたのか、揺れが始まる前の「ゴゴゴ…」というような音の記憶はありません。その時の私が怖いと思っていたのか、不安と感じていたのかは思い出せません。揺れの中で先生が棚の上にあったテレビを必死におさえていた後ろ姿と、頭上にあった鍵盤ハーモニカと本が落ちる瞬間は、覚えています。揺れが収まると先生は、「後ろからランドセルを取った子から、上履きのまま校庭に出て!」と指示を出し、言われるがまま私もクラスの子も、ランドセルだけ持って校庭にでました。

ほとんど全生徒が外に出た時、外にいてもわかるくらい二度目の強い揺れがきました。周りの子は泣いたり不安な顔をしたり、その顔を見渡して、初めてお父さんとお母さんが迎えに来なかったらどうしよう、と不安になりました。揺れが収まってからは、お母さんとお父さんの車が来てないかずっと道路を見ていた気がします。しばらく経つと、お父さんとお母さんが迎えに来てくれました。良かった、と安心できなかったのは、お父さんとお母さんの深刻な顔を見たからだだったのと、いつものような生活ができなくなる、となんとなく感じていたからだと思います。

当時、私の母は、妊娠5か月目の妊婦でした。つわりが酷くベッドで寝ていたところ地震が発生しました。私の安否をひどく心配しながら、すぐお父さんと合流し、学校まで私を迎えに来ました。

震災後、水をはじめとする飲み物はどこも売っておらず、食べ物も持たずに家を出たため、私のおばあちゃんの家には泊まりました。当時は放射能についての情報が乏しく、子どもは被ばくする危険度が高いと言われていたため、お腹の子の命も危ない、と言われていました。さらに当時はガソリンの需要が供給より遥かに上回っており、沿岸部のみならず東北全体がガソリン不足となっていました。東北を出ればガソリンがあるかもしれない、と思い関東に行きました。しかし関東でもガソリンは品薄だと母の友達から情報を得て、親戚のいる山形県へ避難し、そこで何泊かしました。日に日に放射能濃度は高くなり、余震もひどく、母が安全に出産できる環境ではないと判断し、親戚のいる北海道へ避難しました。当時母はこれからどうやって生きていこう、お腹の子は無事なのか、とにかく毎日生きることに精一杯だった、といいます。

そして、私たちがツアーで福島県大熊町に行った時、松永さんという大熊町に住む方に出会い、話を伺うことができました。大熊町は、私の住んでいた原町よりさらに海にとても近く、原子力発電所からとても近い町です。そのため、地震直後は津波の被害、そして原発の被害と、災害と事故が立て続けに起きました。大熊町を襲った津波が一度引いた時、周りの人は、家に忘れ物をした、犬の様子を見に行く、と戻っていく人がいました。戻った直後2度目の津波が押しよせ、3度あった津波が引いた後、町は跡形もなくなり、戻った人が帰ってくることはなかったといいます。暗くがれきだらけの中、行方不明者を探すのはとても困難だったため、明るくなるまで待っていたところ、

原発が爆発。原発から近い大熊町は立ち入り禁止区域となり、住民はもちろん自衛隊や警察ですら入ることが許されませんでした。松永さんは津波から流れ着いた人の「助けて」という声を聞きましたが、立ち入ることも許されず、自衛隊などの力がなければがれきを動かすこともできず、ただその場でその声を聞くことしかできなかった、といひます。また、津波によって流された遺体は学校の体育館に運び込まれ、ブルーシートで覆って横に並べられていました。その中から推定年齢や性別が書かれたブルーシートを一つ一つ確認していくのですが、水をたくさん吸ってばんばんに膨れ上がった顔や手足、体の骨は折れあちこちに向

いていたため、身元の特定ができたのは一部だったという話も聞きました。

③ 震災当時を振り返り

多くの人が口々に、「すぐに戻ってこられると思っていた」と言っていました。当時は今より正しい情報がなく、混乱状態でした。体育館に遺体が運び込まれる様子や、変わり果てた町の様子はまるで戦争のようだ、とおっしゃる人もいました。

当時の町の様子や、被害にあった方々の気持ちを言葉では表すことは本当に難しく、実際に現地に行って現状を見たり、聞いたりして、初めて肌身で感じ、得たものが多くありました。

『3.11の今がわかる会議 in 福島&福島の沿岸部を知る JCN ツアー』（被災者支援センター菊池邦子）

2月11～12日、JCN(東日本大震災支援全国ネットワーク)主催『3.11の今がわかる会議 in 福島&福島の沿岸部を知る JCN ツアー』に参加しました。2月11日午前、特急ひたちで大野駅に降りた乗客は2人。真新しい無人駅舎にはエレベーター3基、快適な待合室も。しかしかつての駅前商店街、旅館、食堂等が何もなく、建物が取り払われたむき出しの土地、コンクリートやパイプの残骸や重機。人々の営みや温もりを感じるものが何もない情景でした。

待合室の一角の本棚に、「大熊町立図書館解体のため行き場を失くした本。ご自由にお持ちください」と様々な本が並んでいて、黄ばんだ本から温もりが伝わり、「町民の皆さんがたくさん読んでくれたよ」と誇らしげに語っているようでした。文庫本を2冊手にしてバスに乗りました。

駅と避難指示解除地区を結ぶ生活循環バスが大熊町役場に到着するまで乗降客はなく、誰も居住していない沿線にはまばらに民家や病院等が取り残されていました。

『3.11の今がわかる会議』には、東京から大熊町に移住し、移住者サポートをしている30代女性、定年まで東電に勤務、現在は復興拠点内の交流施設で働く60代女性、認定こども園から義務教育終了まで一貫教育の新設町立学び舎夢の森の校長先

生が参加していました。他には、いわき市に約4500人、郡山に約1000人、若松市に約500人の町民が居住し、人口の4%（415人）だけ大熊町で生活を始めた状況下で、3市に相談窓口を置いて対応している社協マン、大熊町復興のシンボルめざしてイチゴ施設栽培と加工を起業した工場長ら。大熊町の復興について語り、質疑応答も活発に交わされました。

その夜、宿泊施設の部屋で、駅で感じた寂寥感、バスの車窓から見た景色、会議でパネリストたちが語ってくれたそれぞれの復興…。『多くの任務を果たして古くなった船を、すべて新品の部品に入れ替えてしまった時、元のテセウスの船と言えるのか』（ギリシャ神話テセウスの船）というパラドクスが重なり、答えが見つけれないまま、何時間も泣きました。

翌日は、大熊未来塾を主催する木村さんの案内で帰還困難区域をめぐるツアー。津波にさらわれた父、妻、次女のこと、原発事故で捜索すら出来なかった日々を穏やかに語り、今も当時のまま残っている熊町小学校の2年生の教室の窓辺から「あの2列目、机の上に大好きだった『こびとづかん』の本が乗っているのが娘の席」と、愛おしそうに教えてくれました。「遺品を手元に置こうとは思わない。お友達と楽しく過ごしたあの日のままで

いてほしい」自宅跡、公民館、ご遺体が見つかった場所、その都度バスを停め、当時から現在までの思いもお聞きしました。午後は、帰還困難区域で「もーもーガーデン(ふるさとと心を守る友の会)」

で、殺処分される運命だった牛たちを引き取って一人で面倒を見ている女性の作業を手伝い、川内村に父の移築した古民家でカフェを開業する女性の思いも聞き、心で現地を知るツアーでした。



愛知県被災者支援センターの動きから・・・

「令和 5 年度東日本大震災受入被災者支援市町村等担当者会議」(主催：愛知県防災安全局災害対策課)が 6/6 (火)13:30 からオンラインで行われました。受入被災者登録制度の周知徹底、今年度の事業や避難者在住市町村訪問などについて説明されました。高齢化や経済的な問題等、個々の避難者の抱える問題対応のため、市町村、社協、NPO などと一層の連携を図る事が重要となっています。

【イベント情報】 *開催・内容等が変更になることがあります。詳しくはチラシでご確認ください。

開催日	イベント名	内容（主催など）	会場
8/19(土) 10:30～11:30	あおぞらカフェ「ハーブソルト」を作しましょう	タイム、バジル、ブラックペッパーやガーリック等を塩に混ぜ込み、手作りクレイジーソルトを作ってみませんか？	各自オンライン

くさっちゃんのレシピ> リング豆腐

【材料】

- A：**豆腐 1 丁、ミンチ 100 g (お好きな肉で、乾燥カットワカメ大さじ 3(乾燥したまま使う)、塩吹き昆布大さじ 3、片栗粉大さじ 2 強
B：ゴボウ 15 cm、ニンジン 3 cm、エリンギ 1 本
C：カイワレ大根少々(飾り用。ミツバ等も)
D：おろし大根とポン酢適宜

【作り方】

- ① ゴボウはササガキ、ニンジンは 1 辺が 1 cm の大きさの薄切りにし、加熱して柔らかくする。
- ② エリンギは縦半分に、さらに 2 cm 位の長さに切って、それを繊維にそってうす切りにする。
- ③ 荒熱のとれた①と②と材料 A を大き目のボ-

ルに入れ、滑らかになるまで混ぜ合わせる。

- ④ ③を耐熱皿にのせ、中心を 5～6 cm ほど空けてリング状に形を作る。
 - ⑤ 電子レンジのターンテーブルに割り箸 2 本で橋げたをつくり、端を開けてラップをかぶせた④を乗せて、600W で 8 分加熱する。
 - ⑥ 荒熱が取れたらカイワレ大根を飾る。
 - ⑦ ⑥に D をそえて出来上がり
- * 塩蔵ワカメを塩抜きして使う場合は、片栗粉を大さじ 1/2 増やす。



【編集後記】

- ・エレベーターで一緒になった 9 階に住む小学生が、8 階のボタンを押してくれました。8 階に着くと、「8 階でございま～す」と。私は降りて振り返り、エレベーターが閉まる前に、「上にまいりま～す」。(T.S)
- ・〇足支え 頭を使い 手の仕事 ホンに料理は 全身体操 〇美味しいと 妻に褒められ その時は私の生きる 大きな支え 〇昨日は 妻の梅料理 しっかりと 最後まで支え 私も支え (T.H)
- ・きゅうりの季節の到来！庭の一角、先に 3 本苗を植えた。少し時期をずらしてもう 3 本。ミニトマトも同様に。子どもの頃、初収穫は「初物」と仏壇に供えた。現在も初物は、同じようにお供えして。(T.K)